

鳥羽からアフリカの海へ

今回は西アフリカの海についてお話しします。ガーナ共和国といえど、チョコレート(チョコレート)を思い浮かべる人が多いでしょう。実際、原料の力カオはガーナ経済の柱であり、日本が輸入する力カオの約7割を占めています。また、野口英世が黄熱病の研究中に倒れた地としても知られ、日本と結びつきの強い国です。

吹き付ける湿った季節風(モンスーン)がどんよりとした空をもたらす一方、海岸には激しい高波を運びます。

日常的に台風のような高波が打ち寄せる中、子どもたちは波打ち際で貝を採り、人々はわずかな晴れ間に砂浜へ洗濯物を広げるなど、海岸での生活は自然と隣り合わせです。河口が砂で塞がってできるラグーンも多く、マングローブを燃料にしたり、潮の満ち引きや高波を利用して塩田へ海水を引いたりするなど、自然を賢く利用する知恵が息づいています。

その一方で、ガーナの海岸は深刻な「侵食」という問題を抱えています。砂浜が消失し、高波を防ぐ力が弱まったことで、住居や集落

の浸水被害が後を絶ちません。特に海岸部の低所得世帯への影響は深刻です。資産を失うと再建の時



荒れた海で貝を採る人々



高波で被災して放棄された民家

間がかかるだけでなく、遠地への移転と離散を余儀なくされ、長年培われたコミュニティが分断されてしまうことも大きな課題となっています。

こうした課題を解決するため、令和7年からガーナと日本の国際共同研究プロジェクトが開始しました。私は沿岸域の環境モニタリングを担っています。日本で培った海中の地形や砂粒の大きさを計測する技術をガーナで展開し、効果的な対策を練るための土台を作りま

す。鳥羽の海で鍛えられた計測手法や機器がアフリカの地で真価を發揮し、現地の人々の暮らしを守る一助となるよう、研究を進めていきたいと考えています。

(准教授 岡田拓巳)



Vol.243

市民課人権・市民交流係
TEL 25-1126

赤毛連盟と赤毛のアン

コナン・ドイルにより生み出された小説「シャーロック・ホームズ」シリーズに「赤毛連盟」という作品があります。新聞広告に掲載された、赤毛(濃い赤紫色や明るい銅色、赤褐色、深みのあるオレンジなど)の色の髪の一とたちを集めたグループに関して起きる事件の物語です。

L.M.モンゴメリによる小説「赤毛のアン」には、赤毛の少女アンが登場します。

作中で「赤毛」であることを強調する背景として、赤毛に対する蔑視や差別意識がありました。赤毛のことを「ジンジャー」と呼んで、からかいやじめの対象にすることがあったのです。「赤毛のアン」では、主人公のアンが学校で「Carrot(にんじん)」と呼ばれ、からかわれる場面があります。また、赤毛のひとは怒りやす

く短気で気性が激しいというステレオタイプ(特定の集団に対する固定観念や思い込み)がありました。髪の色が持つ象徴性はヨーロッパにおいて特に顕著で、小説や映画などでは、金髪の女性は家庭的な良妻賢母で、黒髪は情熱的な悪女といった描き分けがされていました。豊穡の女神は黄金色の髪、人魚は海の色である緑色の髪、悪魔や冥界の神は赤色など、神話や伝説の中のイメージが根強くありました。キリスト教における裏切り者が赤毛だったという伝説もあり、それらが赤毛に対するマイナスイメージの要因となっていました。

「赤毛のアン」の作中では、アンが赤毛を気にしており、自身の髪を黒く染めるシーンや、赤毛以上に醜いものはないと思っていたと発言するシーン、ピンクが大好きなのに赤毛だから着られないと話すシーンがあります。

蔑視や差別意識があった背景を知った上で作品に触れると、それらを知らなかった時とは違った見方をする事ができます。どのような差別があったのか、差別について知ることが、差別に対する知識を深め、ひいては差別をなくしていくことにつながるのです。